

第30回 日中戦争史研究会・議事録

2016年9月17日（土）13:00～16:30 愛知大学名古屋校舎厚生棟 W32 講義室

参加者（署名前後順、敬称略）

市川賢一（愛知大学OB）、田中剛（帝京大学）、千賀新三郎（愛知大学OB）、馬場毅（愛知大学名誉教授）、水町誠司（愛知学院大学大学院）、高韻茹（愛知大学）、王魯亜（愛知大学中国研究科）、野口武（愛知大学）、上島卿一郎、張鴻鵬、水野光朗（都留文科大学）、増田喜代三（愛知大学大学院）、成瀬公策、菊池一隆（愛知学院大学）、武内剛（愛知学院大学非常勤講師）、王広涛（愛知大学）

報告1：「第二次上海事変における張嘯林暗殺事件—『申報』の報道からの分析」

水町誠司（愛知学院大学大学院）

【質疑応答】（司会：森久男）

森：今回は杜月笙とか張嘯林という上海を代表する人物のなかで、張嘯林の暗殺事件を焦点に、その前後の事情にいろいろ不明な事件がみられて、なかなかその真相に接近するのが難しいという報告の趣旨だと思います。ということで、今日の報告を聞きまして、皆さま方から積極的な発言をお願いしたいと思います。

水野：レジュメの9頁、10頁についてですが、「信憑性の高い一次資料が充実していない限り、歴史学の基本的な手法では事実が明らかになりにくく、どうしても可能性として語られる推測に頼らざるを得ない部分が出てしまう……仕方のないこととはいえ歴史学上の限界を感じ、歴史に関して必ずしも万能ではないことも明らかになった」という指摘ですが。これは当たり前のことであって、この自明なことを結論としてかなり違和感を感じました。それから、資料について、『上海マフィア伝』という資料が使われているんですが、これは翻訳版が使われているという感じですが、その原書はどうなっているのでしょうか。『申報』のデータベースを使っていますが、このデータベースについてその信頼性はどれぐらいがあるのか気になります。キーワードで検索するのはかなり問題が出てくるのですが、そう

いう点についてもお伺いしたいと思います。

水町：おっしゃる通りです。終わりの部分で歴史学に関する内容は確かに前提的なものがあります。今のレベルではとても深く検証することができません。これに関して、今回はとても難しい問題なので、お答えできません。『上海マフィア伝』の原書はあると思いますが、ちょっとその辺は読んでいないです。

水野：私は聞きたいのはいつ原書版が出たのかという問題です。日中戦争中に出た場合はかなり信頼性があるし、最近であればどうかなあとと思います。

水町：そうですね、そこまでは調べていないです。恐らく最近かなあ。少なくとも杜月笙なくなるまで、間違いなく抗日戦争中ではないと思います。データベースの問題について、結構検索でひっからない部分がチョコチョコ出てきます。それはどうも検索のキーワード選択の問題に関わると思います。

馬場：これは非常に実証するのが難しいと思いますが、張嘯林の暗殺は非常に政治的な事件で、国民党や汪精衛政権に非常に影響を与えているということで、暗殺事件に当たって国民政府の軍、あるいは国民党の意思について、もし分かったら説明してほしいです。

あと、資料の問題について、こういう人たちの話というのはどうしても、いわゆる歴史的な資料が使用されていないという感じがします。もっと当事者の回顧録や元青幫関係者の資料とかを調べたらいいと思います。

それから、上海市档案馆にですね、杜月笙の経営していた企業資料とか残っていて、但し最近は上海市档案馆に入りにくいという話もあって、あまり公開されていないみたいです。資料のほうについても一つ付け加えたいのは、愛知大学豊橋キャンパスに上海市の英文資料があります。租界の記録とか、裁判の記録が在るかどうかわかりません。

最後に青幫に「24 字輩」があって、張嘯林は「通字輩」で杜月笙は「悟字輩」です。字輩的に見れば張嘯林が上なんです。青幫は上下関係を重視するから、張嘯林は杜月笙の先輩に当たります。張嘯林は先輩なんだけど、杜月笙は非常に時流にうまく合っているというか、結果を見れば有名になっている。杜月笙はこういう字輩の制度を廃止した。自分の門弟だというふうにして、長年青幫に流れていた上下関係を変えてきたんですね。今回の報告を聞いて、あまり青幫内部のことに触れていなくて、そういう資料を参考できればいいと思います。

水町：一応参考文献を見る限りでは、蒋介石は張嘯林を暗殺してほしいという感じで、そういう電報を打っています。

森：今日の報告は張嘯林暗殺前後の事情について分からないことがあるということです。馬場さんの指摘として、暗殺の背景みたいなものが重要じゃないかなというような意見が述べられたと思います。

上島：上海の銀行についてですね、日中戦争期においては各租界の銀行とか、一般の中国の銀行とか、その儲けたお金はどうやって動いたかということについて知りたいです。

水町：その部分について、参考文献にも、申報にも、調べたら限りは出てこないですね。

市川：張嘯林の暗殺について、いわゆる軍と戴笠から潜伏区区長の「周偉龍」という人物を経由して実行したという話を読んだことがあります。「周偉龍」について調べたことがありますか。

水町：参考文献を見ている限りなかったと思います。すみません。

市川：暗殺の実行犯は終戦後釈放されて、軍当局から補償金をもらったという話があったのですが、そのあたりはどうでしょうか。

水町：そのあたりは調べていません。今回は暗殺の経緯とかを調べています。1942年ごろまでしか実は調べていなくて、終戦後のことは分かりません。

馬場：中国の改革開放以後ですね、「青幫」についてもいろいろ評価されていますが、杜月笙の抗日戦争に向けてナショナリズム的な側面が語られて、張嘯林は結局暗殺されましたが、杜月笙に対する中国の評価はどう考えるのだろうかという質問です。

水町：確かにナショナリストですね、基本的には。参考文献を読んでいると、この人は本当にナショナリストなのか、たまに疑問が出てくるんです。例えば、第二次上海事変の時、杜月笙は本格的に戦うのではなくて、香港に行ったりしてするんです。

馬場：杜月笙の部下は「忠義救国軍」を組んでいたんです。杜月笙がいなくなっても彼の部下が彼の遺志を継いでという形になるんです。そういう側面もあって、現代の中国では彼を評価しています。

森：今日の報告を聞いてみますと、張嘯林の暗殺の前後経緯を調べて、いろいろわからないことがあったというふうな報告だったんですけども、今後の研究計画の中でこの暗殺事件の分析というのはどういう意味を持つんですか。

水町：今のところは書いていませんが、考えている範囲としては、張嘯林の暗殺事件を機にもともといくつかの暗殺合戦もあり、最終的に杜月笙の暗殺指示などとの関連性について究明したいと思います。

森：今日の結論の部分ではあまりはっきりした資料はないですけど、報告を聞いてみますと、張嘯林の暗殺経緯より暗殺された前提条件などに研究の意味があるように気がするんですけど、その辺はどういう考えですか。

水町：はい、確かにそういう方向になってしまったんですね。

森：今日の報告を聞いた印象では、暗殺の細かい経緯そのものよりも、その前提条件となる背景、情報戦など、そちらのほうが面白そうな気がします。

菊池：そっちのほうが確かに面白いです。やっぱり日本軍があつて、国民政府や共産党も杜月笙をみているなか、もちろんアヘンとか売春とかやるんですけど、そういう資料は台湾にあるかもしれません。香港にはないです。

森：あと上海に地方史研究者がいて、上海のマフィアに関する本もいっぱい出ていますけど、その辺はどれぐらい調べたんですか。

水町：確かにいくつか購入しているんですが、どれぐらい出たと言われるとわかりません。

森：上海にある「上海書城」に上海地方史コーナーがあつて、その辺に旧上海に関する本

がいっぱい集まっているんです。そして、「上海地方史弁公室」もあって、「地方誌」が編纂されているのです。いろいろ情報がでてくると思います。

森：今日の報告はいろいろな要素が組み合わさって、非常に面白いテーマですが、将来はこういうテーマどういうふうに変化させていくのか、その辺のところによく考えられると、次の研究テーマにもつながるのじゃないかというような気がします。

報告 2 日本敗戦前後の留学生と「集合教育」の実態

帝京大学 田中剛

【質疑応答】

森：今回の報告は日本敗戦前後の蒙疆政権ないしは満州政権からやって来た留学生たちがどのように戦後の混乱のなかでどういうふうに変化をみいだしたのか、これに対して日本政府はどういうふうに対応してきたのか、従来あまり知られていない話がたくさん紹介されています。これに対して質問のある方、積極的にご発言ください。

成瀬：非常に単純な質問なんですけど、一つは蒙疆政権か満州国から派遣されてきたということで、最初の段階では、公費で留学してきたと思いますが、それが何時まで続くかという質問です。あとは個人差があると思いますが、留学生の日本語学習能力については日本に来る前に現地で習得したのか、それとも日本にきてから勉強したのかという質問です。もうひとつは、お話を聞いて、結構個人に対しての聞き取りがされているというふうに伺ったんですが、本人が亡くなる前に出した回顧録とかオーラルヒストリーとかの状況はどうなっているのかを質問したいと思います。

田中：満州国派遣の留学生はもちろん公費が大半で、彼らに対する支援は 8 月の時点で止まります。9 月に入って、蒙疆政権なり満州国なり汪精衛政権なりの大使館などが軽井沢とか函館とかに疎開していました。これらの留学生にとって 1945 年後半は一番苦しい時期で、何とか乗り越えることができた。

日本語能力は様々だと思いますが、例えば、モンゴル人の中で、日本語が達者な人もいれば、全然話せない人もいます。一応日本派遣の入学試験を受けるため、その前に満州国や中国本土で半年間または一年間の日本語教育を受けて、日本に渡ってきてという形にな

るんです。

あと彼ら自身が語る記憶というのは、今までは彼ら自身がどうして日本に来るのか、その経緯について語るケースは少ないと思います。最近では状況が変わったのかもしれませんが、ぽつぽつと個人史という形で出版する人たちも出てくるようになったんです。

菊池：派遣された留学生の構成について、満州国だったら満州族と漢民族のほうが多いと思いますが、蒙疆政権の場合はやはりモンゴル人が多いということでしょうか。彼らの日本に対する抵抗はありますか。あとこの国費あるいは公費について、金はどこが出てくるのですか。あと三ページにある「中華民国」というところで、これは何をさしているのか。汪精衛政権の中華民国でしょうね。混乱させます。あと、どうしてモンゴル人が岩手に集中するのか。最後に中国人、台湾人、朝鮮人、琉球人とかいろいろ呼ばれていますけど、実際に戦後台湾人は中国人として戦勝国の人と扱われていたんですね、中国人も同じなんですけど、彼らの身分あるいはアイデンティティについて、ちょっとわからないです。

田中：抵抗運動があるんですけども、聞き取り調査では彼らがこれについて言及していません。

お金について、満州国として国が出すお金もあれば、積極的にモンゴル人を派遣する団体がお金を出すという事例もあります。日本側の団体がお金を出すという場合もあります。例えば、天理教なんかも外国人留学生に対して積極的に支援したりすることもあります。

戦後これらの留学生の動向は確かに様々です、モンゴル人として独立のモンゴル人として中華民国のことに関わらない人もいれば、モンゴル独立運動に熱心な人もいます。勿論、そのまま台湾に渡るケースもあります。台湾人は確かに内地留学という形で、やっぱり大陸中国からの留学生と仕組みが違うので、今回では目をつぶったということになります。戦後、台湾の人に対して、GHQによりますと、「解放国民」と位置づけています。朝鮮出身者と同じです。

馬場：東京の後樂園の所に善隣学生会館があって、あれは満州国からの学生の受け入れ機関ですけど、戦後のこの時期はこの善隣学生会館はあまり関係ないですか。

田中：関係があると思いますけども、それは今回の報告では触れていません。戦後に集合教育が終わって、留学生たちが自由になるというときに、その大半は東京に戻り、そのなか後樂園の寮に住む人もいます。1950年代にはモンゴル人が40人ぐらい暮らしたそう

です。

馬場：後樂園はそもそも満州国のものだったのですが、敗戦後とりわけ 1949 年中華人民共和国成立以来、どちらの中国を代表するのかということが問題になって、結局裁判になりましたが、お聞きしたいのはこの時期にモンゴル人留学生の中で中国系と台湾系のどちらが多いですか。

田中：私の聞き取り調査では、残ったモンゴル人はやっぱり共産党系、台湾を支持する留学生は少なかったという印象を受けました。やっぱり出身地は中国大陆ですから、感情的には台湾に向くということもありますが、少ないかなと思います。先生がおっしゃった 1960 年代の中国人留学生は中国からの留学生のことですか。

馬場：違います。1960 年代には大陸中国のルートはなくて、国交正常化もまだ実現されていなかったんです。在日の華僑総会の影響で大陸中国を支持する華僑学生のことです。でも、台湾からの留学生はいました。1960 年代の華僑の間で大陸系の人たちと台湾系の人たちがしょっちゅうぶつかるんです。

水野：これらのモンゴル人留学生はその後のモンゴル人民共和国との関係はどうでしょうか。レジュメの所にモンゴルからという表現を使っていたんですが、ここでのモンゴルは国ですか地域ですか。あと、戦時中満州国からの留学生は戦後彼らの国籍はどうなっていたのでしょうか。戦前や戦時中は満州国籍があり得るが、戦争に負けたあと、満州国籍学生たちがそのまま中国籍になったのでしょうか。あるいは蒙疆政権の人たちはモンゴル人民共和国の国籍になったのか、それとも中国籍なのか、という質問です。

田中：実はやっているのは内モンゴルの学生ですので、このモンゴル人民共和国との関係について、強いて言えば聞き取り対象の一人は、その後華僑総会と意識的に距離を置いており、1990 年年代に入って、モンゴルからの留学生は、モンゴル国の領事を自宅に招いて、付き合いをしたりして、というケースもあります。満州国は結局国籍法を作らないまま敗戦を迎えたじゃないですか。少なくとも 1946 年 3 月までに中国在日代表部はこれらの学生に対して登録表を発給して、そのまま中国籍になるというわけです。改めて 47 年に華僑証明書として、華僑保証書とか、華僑登録書とか発給されます。これらの書類があって初めて戦勝国民としての特配を受けるという形になるんです。多くは特配食料とか、物資

があつて、そこで登録は進んでいくと。

森：今日の研究会はこれで終わります。次回は11月5日にします。